

【研究ノート】

翻訳ソフトによる逆翻訳を用いた英語ライティング指導の可能性
－英語の自学自習支援の一手段として－江藤 裕之¹⁾*

1) 東北大学大学院国際文化研究科

英語ライティングの学習指導においては、読解とは少し異なる側面、とりわけ読解では看過されがちな機能語の習熟が重要な鍵となる。前置詞や冠詞などの機能語は、綴りは簡単だが、用法は多岐にわたり、微妙なニュアンスが含意されるため、学習者のみならず、英語教員にとっても正確に使いこなすことは難しい。そこで、翻訳ソフトによる逆翻訳という手法を用いて英語表現をチェックすることで、こういった問題が解決できないか考えてみた。具体的には、学習者の書いた英語 (SL1) を翻訳ソフトで日本語に訳し、さらにその日本語を同じ翻訳ソフトで英語 (SL2) に訳しなおす。最後に、SL1とSL2を比較することで語の選択、文法、構文、コロケーションなどをチェックするという方法である。AIの発達で機械翻訳の精度には格段の進歩が認められており、この手法は英語ライティング指導のみならず、英語母語話者に接することのない英語学習者の自学自習においても有効な手段となろう。

1. 正確な英語表現に必要な文法

1.1 「文法」とは何か——西洋精神史の視点から

Grammatica est recte scribendi atque loquendi ars.¹⁾ これは、リリー (William Lily, c.1468-1522) のラテン文典における文法の定義である。この文法書は、英国でルネサンスが始まる16世紀の初め頃に書かれ、16世紀半ば、時の国王ヘンリー八世によって、グラマースクールにおける唯一の公的なラテン語学習書として指定された。「欽定文法 (Royal Grammar / Authorized Grammar)」の異名をとるリリーのラテン文典は、それまで英国で長らく使用されてきたドナトゥス (Aelius Donatus, *fl.* 4c) やプリスキアヌス (Priscianus Caesarinensis, *fl.* 5c) のラテン文典に代わるものとしての地位を確立した。後に英訳され、ラテン語を英語で学ぶための基本図書、さらにはラテン語学習を通じて、八品詞といった視点から自らの母語である英語の理解を深めるための参考書として、その人気は19世紀頃まで続いた (Lupton 1921-1922: 1143-1144; McKnight 1928: 89-91, 218-219; Flynn 1945: x; 渡部 1975: 39-40)。

この文法の定義を英語に直訳すれば Grammar is the art of writing and speaking correctly. となる。こ

の定義は、文法書の構成²⁾ とともに、17世紀から18世紀にかけての英国における英文法の規範化の試みの中で、文法家たちに引き継がれていく (McKnight 1928: 377ff.)。18世紀の終わりに規範英文法 (いわゆる学校文法) を大成したとされるマレー (Lindley Murray, 1745-1826) の英文典における英文法の定義は、English Grammar is the art of speaking and writing the English language with propriety.³⁾ となっており、これはリリーの文法の定義と同じと言ってよい。リリーの文法の定義は、ローマ時代の有名な修辞学者であったクインティリアヌス (Marcus Fabius Quintilianus, c.35-100) を採用したものであり (McKnight 1928: 218)、その意味でも西欧の伝統的な言語教育、いわゆる自由学芸 (artes liberales [liberal arts]) 教育における基礎三科 (trivium)⁴⁾ の流れを引き継ぐものと考えることができよう。

いつの時代もそうだと思うが、文法 (言語) 研究は理論的なものと実用的なものに分けられ、西洋の中世においても、ラテン語をマスターするための実用文典が編纂される一方で、様態論者たちによる言語の思弁的考察も行われた (渡部 1975: 38; 興津1976: 19-25; Robins 1997: 79ff.)。スウィート (Henry Sweet, 1845-

*) 連絡先: 〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学大学院国際文化研究科 hiroyuki.eto.d6@tohoku.ac.jp

1912) は文法を「理論的 (theoretical) 文法」と「実用的 (practical) 文法」に分け、前者を「言語の学問 (science of language)」とし、後者を「ことばの技芸 (art of language)」とした。理論文法の特徴は記述的 (descriptive) であり説明的 (explanatory) であるとし、歴史的 (historical)、比較的 (comparative)、一般的 (general) の下位区分を設けた (Sweet 1891: 1)。最後の3つの下位区分は時代を感じさせる分類ではあるが、これにしたがえば実用文法 (practical grammar / art of language) は規範的 (prescriptive) であり講義的 (pedagogical / didactic) と特徴づけられよう。リリーにしても、マレー、そして、多くの17-18世紀の英文法家にしても、文法を「ことばを正しく話し、書くための技術」と定義していることから、スウィートの分類から言っても、これらの文法書はあくまでも言語 (ラテン語、英語) の習得を目的とした実用的な文法書であったことがわかる。

1.2 正確な表現のための規範文法

日本語を母語とし、外国語としての英語を日本で学ぶ私たちにとって、この伝統的な文法の定義にはいささか違和感を覚えないだろうか。私たちが英語を学ぶときに英文法を意識するのは、まずは英語を読むときであって、外国語である英語で書かれている文の意味を正確に理解する手段として英文法を学習するのではないだろうか。それは、語形の変化とそれが意味する内容 (動詞の時制や名詞の数) であったり、語順であったり、構文であったりする。英語を話す、書くための文法の解説に特化した参考書はないとは言わないが、それは二義的なものだと思う。

人々が自分の母語をあらためて意識するのは、いつ、どういった状態で起こりえるのであろうか。少なくとも、毎日の生活の場において母語で意思疎通を図ったり、新聞や本を読む分には母語、とくに母語の文法は意識しない。外国語——私たちの多くにとっては英語——を学ぶとき、その言語の規則である文法に接してはじめて、母語との違いを認識し、母語を相対的にひとつの言語と見ることができ、そこで母語の文法に関心をもつことがあるのではないだろうか。

その他に、母語の文法や語法を意識することがある

とすれば、それは文章を書く時ではないだろうか。知らない漢字を辞書で確認する程度のことであれば、読む時にも起こりうるが、正しいことばづかいが気になるのは、やはり文章を書くという能動的な知的活動の場合ではないだろうか。本稿を書いているときも、「違和感を感じる」という言い方はよいのかとふと疑問に思った。話す分にはそれほど気にしないが、二重表現 (重言) のようにも思え、いろいろと調べてみると、間違いとは言えないものの「違和感を覚える」の方がよからうという結論に達した。これは、文法ではなく、語法というかコロケーションの問題であるが、ことばの使い方が気になるというひとつの例となろう。

英語母語話者にとっても状況は似たものだと思う。かなり前のことだが、英語母語話者に自動詞を vi、他動詞を vt と略す理由について尋ねるアンケート調査をしたことがある。語学を専門にしていない人はほとんど回答できなかった⁵⁾、というよりも、大部分の研究参加者が自動詞・他動詞という用語を知らなかったし、そもそもそんなことに関心がない。それは当然のことで、自他動詞の知識が無くとも日常のコミュニケーションには少しも不便は感じないし、必要のないことは熱心に学習しない。しかし、そういった英語母語話者が英語の語法や文法を気にする、気にしなければならないのが英語、それもアカデミック英語やビジネス英語のような、一定の型を守らなければならない、俗に言えば「きちんとした英語」を書くときである。

英語母語話者を対象としたアカデミックライティングの代表的な教本である *Publication Manual of the American Psychological Association* (以下、APA Manual とする) の Grammar and Usage の項 (American Psychological Association 2020: 117-125) や、全米でもっとも人気があるライティング読本⁶⁾ である *The Elements of Style* (Strunk and White 1979) では、文法・語法のルールが羅列されていて、そこには詳細な説明はほとんどない。それは、まさに規範的 (prescriptive) で講義的 (pedagogical / didactic) な記述態度の典型である。

APA Manual の文法記述から、ひとつ具体例を挙げよう。主語の人称・数と動詞の形の一致は英語のみならず、ドイツ語やフランス語といった印欧系の言語を学ぶときに私たちの頭を悩ませる問題である。

APA Manualで「4.15 Subject and Verb Agreement」という項を設け、注意すべき点が記載されている。その最初にA verb must agree in number . . . with its subject, regardless of intervening phrases such as “together with,” “including,” “plus,” and “as well as” という注意書きがあって、次に、

Correct: The percentage of correct responses, as well as the speed of the responses, increases with practice.

Incorrect: The percentage of correct responses, as well as the speed of the responses, increase with practice.⁷⁾

という正誤文が挙げられている。記述はこれだけで、correct / incorrectの判断理由についての説明はない (cf. American Psychological Association 2020: 119)。ここのポイントは、例文の主語はThe percentage of correct responsesのpercentageなので単数であり、as well asをandと勘違いして主語を複数ととらえてはいけない、あるいは動詞に近いresponsesを主語と見なしてはいけないということだ⁸⁾。

こういった点から、私はリリーからマレーにいたる規範文法の伝統は今日のアカデミックライティング教本の中に生きていて考えている (cf. 江藤 2004, 2011, 2012, 2020)。簡潔明瞭な文章で、内容を正確に伝えることを第一の目的とするアカデミックライティングにおいては (American Psychological Association 2020: 113-114)、なんとなく伝わればよいといった態度で文章を書いては困る。そして、その文章作法には、リベラルアーツの基礎三科 (文法、論理、修辞) の知識が必要だが、まずは文法・語法の習得である。

1.3 「書く」ことに必要な英文法・語法の知識と英語ライティング指導の限界

1.3.1 「書きことば」の特徴

Long time no see. という言い回しがある。「お久しぶりです」という意味であるが、今では、あまり使わないという人もいる。もちろん、これは文法的には破格の英語で、きちんとした英語で言おうとすれば、It's been a while. だとか、It's been such a long time since I saw you last. といった表現になろう。この

Long time no see. はピジン英語であり⁹⁾、文法的には問題があったとしても通じる英語ではある。

私の恩師は、日本のピジン英語と称して「Father mother Ginza go ox eat yesterday. は通じますよ」とよく言われていた。この英文は、文法的にも語法的にも間違っている。時制 (動詞の変化) も語順も正しくないし、また、oxは食べられない。食卓に上がるとbeefになる。テストでこんな答案を書いたら確実に減点される。しかし、言いたいことはおそらく通じる、つまり、相手は理解してくれるだろう。

テレビのバラエティーショーで人気のタレントが型破りの英語で何とか相手の外国人に理解してもらいながら、笑いを取る番組がある。そういうのを見ると、「なんだ、これでも通じるんだ。主語や述語、動詞の変化なんて、ややこしい文法は必要ないんだ」と、英語にコンプレックスをもっている人なら、けっこう勇気づけられる。そして、結論は「文法なんかいいから、間違いは気にしないで、とにかく話してみよう」となる。この考えにも一理ある。会話には必ず相手がいる。単語を並べただけの文法ルール無視の文でも、何か英語らしきものを話しているという姿勢が相手に伝われば、向こうがこちらの言いたいことを理解しようとしてくれる。コミュニケーションがボールのやり取りのようなのだとすれば、ボールを投げれば、悪送球でも相手は何とか受け取ろうと努力してくれる。

しかし、書きことばはそうはいかない。ボールを受け取る相手が時間と空間を超えた先に存在しており、伝達の手段はverbalなものだけで、non-verbalやparaverbal¹⁰⁾な要素は、たいていの場合、記述されない。書きことばは言語表現だけが頼りなのであり、そのため、ルールをしっかり守って文章を書く必要がある。Long time no see. 式の英語ではまずい。そして、書いたものは残る。「文法なんかいいから、とにかく書いてみよう」とは言えないのである。

1.3.2 「書く」ことに必要な英文法・語法

では、書くことに必要な英文法・語法について考えてみよう。「私たちは3時に本屋でマイクに会うつもりです」を英語で表せば、ひとつの可能性としてWe will meet Mike at the bookstore at three o'clock. と表現できる。もちろん、英語の初学者がくだけた状況

で何とか相手に伝えようと思えば、We meet Mike book store threeで通じる可能性は十分ある（threeを言うときに指を3本立てればなおよいだろう）。要は、文法的機能を示す語（日本語で言えば「てにをは」のような助詞など）は省略して、内容語だけを並べれば、言われた相手は状況を理解しようとしてくれる。話し言葉では、ふつう、意味的に大切な語（主として内容語）が強く、大きく、長く発声され、atなどの機能語に強勢が置かれることは余程のことがない限り、ない。しかし、書き言葉はすべての語が同じ大きさで書かれる。少なくともプリントされたものではそうなる。書き言葉は、それぞれの語を、実に平等・公平に取り扱っている。

場所や時を表す前置詞のat / in / onの区別を「点・接触・範囲」といったイメージで理解しようと言われても、なかなか難しい。そこで、どれを使えばよいか迷ったら、話す時であればそれを言わなければよい。迷って黙り込んでしまうよりは、そのような機能語は無視してでも何かしゃべった方が言いたいことは伝えられる。一方、書きことばでは、... three o'clock.のように前置詞atを書かなかつたり、... at/in/on three o'clock.のように、迷って、知っている前置詞を並べたり、あるいは... at three o'clock.のように、自信がないのでatを小さく書くというのは、どれも駄目である。きちんとat three o'clockと正しい語を同じ大きさで書かなくてはならない。

We will meet Mike at the bookstore at three o'clock. という英文を読む、つまり、その意味を理解するには、主だった語の意味を調べ、動詞の時制や法を確認し、語順から語・句・節のかかり具合をチェックすれば、意味を取ることはできる。この場合、単語の意味を辞書で調べることを除けば、後は文法的知識ということになり、いくつかの法則やルールを覚えておけば、その知識はいろいろな場面で応用できる。しかし、これと同じ内容の英文を書く、つまり、正確に表現するとなると、前置詞や冠詞を無視することはできない。そして、これらの語はスペルを覚えるのは苦勞しないが、用法となると1つ2つのルールでは間に合わない。冠詞について言えば、読むときにもat the bookstoreかat a bookstoreの違いが重要な意味をも

つ場合もある。しかし、とりあえず「本屋で」と理解することは可能である。しかし、書く場合には、aとtheの用法の区別ができていないと、正確に表現することができない。

もうひとつ例を挙げると、話しことばとしてはHe is taller than me. は問題ないであろう。しかし、書きことばとしては問題で、He is taller than I (am). としなければならない。話しことばでmeとなっているのは、おそらく接続詞のthanを前置詞と取り違えたか、文の右側にくるのは主格 (I) よりも目的格 (me)の方がなんとなく座りがよいと感じられたからであろう。しかし、「私」と比較されるのはheなので格 (case) を合わせて主格のIにしなければならない、というのが書きことばの作法である。

要は、英語を書くときには、英語を読んだり、話したりするのは注意を向ける先が少し異なってくるということだ¹¹⁾。ことさら「書くための文法」などと言わなくともよいが、読むときにはそれほど注意せずに済んだものでも、書くときには注意しなければならないこともある。前置詞や冠詞の用法は、私たち英語非母語話者、それもインドヨーロッパ系の言語とはかけ離れたことばを話す私たちには、その修得は容易ではない。英語母語話者の直観をもたない私たちは、辞書に記載されている説明に頼るか、英語学習で培った私たちがなりの感を働かせる他にないだろう。そして、それは往々にして頼りないもので、英語母語話者にすればおかしな表現になるのではないだろうか。

1.3.3 英語ライティング指導の限界

英語教師として、私は前置詞や冠詞の用法について、一般の英語学習者よりは多少なりとも詳しく知っているつもりではあるが、それでも英語論文のネイティブチェック（英語母語話者によるproof reading）ではいまだに修正される。文法的に正しく書いても、語法やコロケーションの間違いを指摘されたり、前置詞や冠詞を修正されることは少なくない。前置詞や冠詞については、辞書にあるさまざまな意味・用法をすべて覚えるのではなく、そこからコアになるイメージをつかむ学習法が有効だと考えており、それに沿った教授法を考案しているが（江藤 2015）、それでもすべての問題が解決できるとは思っていない。

こういったことから、英語教師といえども、正しい英文が書けるように指導するには限界があると思う。そのことをわかった上で、できるところまではやるという人もいれば、最初から試合放棄して、前置詞や冠詞はどうせ日本人には使いこなせないのだから間違えて当然と言い放つ英語教師もいる。外国人と接することのない環境で、外国の文明を取り入れるために外国語文献の解説が唯一の外国語学習の目的であった時代は過ぎた。英語の四技能を習得させることが英語教育の重要な課題となっている今日において、こういったライティング指導の問題を解決する有効な手段はあるだろうか。

2. 問題解決に向けたひとつの方法

それでは、以上に指摘した問題とその背景を踏まえた上で、英語非母語話者である私たち日本人が日本で英語を学習する状況の中で、そのライティング学習・指導に際して効果的だと思われる方法を考えてみよう。

2.1 英語ライティング指導におけるレベル

大学の学部レベル（一般教養課程）で私が担当する英語ライティングのクラスでは、ライティングの際に注意すべきレベルを次のように分けて指導している。

0. Spelling & Punctuation

1. Grammar / Usage

2. Logic

3. Rhetoric

Misc.

「0. Spelling & Punctuation」は、丁寧に書く、綴りや句読点を間違えないことに注意するというレベルである。実際のところ、手書きでなければ、つまり、ワープロソフトを使用する限りにおいては、それほど問題にならないレベルである（よって、「0」としている）。もっとも、takeと入力するつもりが、タイプミスでtaleと入れてしまっても、スペルチェッカーは作動しない。ケアレスミスのたぐいではあるが、最終的には何度も文章を読み返し、自分の目で確認して、こういったタイポ（誤入力、誤記、誤変換など）を放置しないように注意をうながす。

続く1～3のレベルが英語ライティングの指導では

中心的な部分となる。お気づきのとおり、これは西欧中世以来のリベラルアーツ教育の基礎三科をそのまま踏襲している（と、大げさに言っても、カテゴリーだけの話しではあるのだが...）。「1. Grammar / Usage」のレベルでは、たとえば、

- ・主語の数と動詞の一致、とくに三人称単数現在
- ・テンス、アスペクト
- ・単数vs. 複数（可算、不可算名詞）
- ・冠詞（a / the / 〇）

といった基本的な文法事項の他に、熟語表現や動詞語法が適切であるかなどチェックする。ここは、いわゆるセンテンスの段階であり、いわゆる「英作文」のレベルとなる。

次の、「2. Logic」のレベルでは、

- ・代名詞（とくに、格変化）の対応関係
- ・パラレル構造¹²⁾
- ・比較の対象
- ・論理的矛盾の有無

などをチェックする。論理的矛盾の有無とは、たとえば、「彼には友人がいない」の英語はHe has no friends. とfriendsは複数が多いが、「彼には父親がいない」の場合は、生物学上の父はひとり（単数）なのでHe has no father. とfatherは単数がよい、といったようなことである（cf. Huddleston and Pullum 2002: 389-390）。つまり、文法構造（構文）的には間違っているとはいいにくいだが、論理的におかしなところが無いかを確認するレベルである。

私は、英語非母語話者が学習を通じて英語で作文する場合、このLogicのレベルにまで達していれば、合格点をあげてよいと考えている。さらに、上の表現を目指すのが「3. Rhetoric」のレベルで、これは次のような、より英語らしい表現、より説得力のある（assertive）な表現、微妙なニュアンスを伝える表現などである。

- ・名詞表現
- ・助動詞（とくにモダリティーに関して）
- ・コロケーション（形容詞＋名詞、動詞＋名詞、動詞＋副詞、前置詞＋名詞）
- ・比喩表現、ことば遊び、名文句のもじり
- ・習慣＋発想の違い

たとえば、英語は名詞表現を好む (cf. 安西 1982)。そこで、「彼は英語が話せるので一財産築いた」を、He speaks English well, so he has made a fortune. ではなく、His ability to speak good English has made him a fortune. と締まった名詞表現にしてみる。また、「彼は東北大で勉強している」はHe studies at Tohoku University. としてもよいが、studyの目的語が明らかでない場合は、むしろHe is a student at Tohoku University. とstudyの名詞表現であるstudent (study + -ent [人]) を使用することで解決できる。どちらが、より英語らしい表現なのかは、英語非母語話者である私には判断しにくい。こういった知識は、表現にいろいろなヴァリエーションをもたせるといふ意味では有用な視点を与えてくれる。

最後の「Misc.」は、その他 (miscellaneous) のチェックポイントで、たとえば、

- ・具体的に書いているか
- ・簡潔な表現になっているか
- ・受動態、否定表現、名詞列 (noun strings)、複文、同語反復はできるだけ避けているか
- ・俗語、隠語は使用していないか

といった、APA ManualやStrunk and White (1979) などで示される注意項目のチェックである。

すでに述べたように、以上のレベル (チェックポイント) は、主としてセンテンスレベルに対応したものであり、ここからパラグラフレベルの注意点、さらにはエッセイ、タームペーパーを書く際の論理展開といった指導が、アカデミックライティングの授業では必要になってくることは言うまでもない。

2.2 逆翻訳・二重訳読・原文復元法

外国語としての英語を日本で学ぶ日本語母語話者にとって、上記の各レベルに挙げた事項を習得するには、基本的な英文法を学んだあと、質のよい英文のインプット (聴き、読むこと) を不断に続けることが「王道」なのかもしれない。が、とくに「1. Grammar / Usage」と「2. Logic」のような英語ライティングの基礎となる内容の学習・指導に関して、有効ではないかと考える方法に「逆翻訳」がある。

逆翻訳 (back translation) とは、翻訳された文章

をもとのことばに翻訳しなおす作業のことである。つまり、原文となるある言語 (ソース言語: SL1) を他の言語 (ターゲット言語: TL) に翻訳し、さらにその訳文を元の言語 (SL2) に訳すことを言う。簡単に言えば、日本語の文章を英語に訳した場合、その英語の訳文を再び日本語に訳し直して、元の日本語の文章と比較し、最初に訳した英文の確度をチェックすることである。

SL1 → TL → SL2

SL2 (逆翻訳文) と SL1 (原文) を比較することで TL (翻訳文) の確度チェックをする

私の経験では、調査研究における質問用紙の翻訳が正確かどうかのチェックでこの逆翻訳という手法がよく使われていたようである。他にも、たとえば、製薬・医療分野の関連書類、マーケティングや広告、契約書などの法的文書、専門性の高い文書 (論文) など、高い精度が求められる文章の翻訳のチェックに使われているようだ。具体的には、翻訳の際に生じる曖昧な点を特定し、意図した通りの内容の文章が翻訳されているかを確認するのに逆翻訳は有効である¹³⁾。

逆翻訳を語学学習に使うというアイデアはとくに新しいものではなく、これに似た手法は、冒頭に述べたリリーのラテン文法が広く使われていたころにはすでに行われていた。鶴見 (2007) によれば、1611年に英国で出版されたキケロ書簡集は「ラテン文法の知識を生かして、ラテン文学を英語へ逐語訳 (verbal translation) することによって、英語表現を学ぶことを目的とした読本」(65) であり、そこから「ラテン語教育を範としつつ開始された初期の英語教育法を知ることができる」(65) という。この学習法は、「ラテン文学をテキストとして、ラテン文法の知識をもとに、正確な英訳を行うというもの」(67) であった。さらに、鶴見は次のように述べている。

このようなラテン語の文法訳読 (grammatical translation) 自体は、ラテン語習得の方法としてすでにリリーのラテン文法の1546年の版以降に付された「読者へ」と題された巻頭言でも推奨されている。

.. 英訳された文をラテン語の原文に戻し、それによって統語法を学ぶのである。さらに、ケンブリッジの古典学者で『教師』(1570)の著者ロジャー・アスカムは、この教授法を、ラテン語を十分習得した生徒に最終的にやらせる練習として捉え、推薦した。『教師』の冒頭で著者が指示する「二重訳読」(double translation)では3冊のノートが用いられる。1冊目でキケロの英訳をさせ、2冊目でそれを再びラテン語訳させる。そして、そのラテン語訳をオリジナルのキケロのテキストと比較する。3冊目のノートに、その練習を通して理解したラテン語の所有格、訳語、同義語、反意語、句などを書き込むのである。(2007: 67-68 下線引用者)

まず、キケロのラテン語を英語に訳す。次のその英語に訳した文章をラテン語に訳してみる。そして、その訳したラテン語をもとのキケロの原文と比較する。そうすることで、ラテン語の文法事項や語彙を習得するというのだが、これは原理的には逆翻訳と同じ方法であり、学習者が自身のラテン語の能力を自覚し、どこが弱点で、どのようにそれを修正したらよいかを自学自習できる。

この手法は、フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) も実践していたようである。ただし、フランクリンの場合、外国語の習得ではなく、母語である英語の表現力を磨くために、模範となる英文を自分で書き直し、そして原文と比べたという(渡部 1979: 197-198)。ここからヒントを得て、渡部はハマトン (Philip Gilbert Hamerton, 1834-1894) の『知的生活』のテキストの一部を自分で和訳し、その和訳から英文を復元するという「原文復元法」で自身の英語表現力を鍛えた(1979: 201ff)。これを徹底的にやれば、その原文のテキストを暗記するのと同じ効果をもたらす。さらに、テキストの英文を自分で訳すのではなく、すでに存在する日本語訳を用いるといった、より簡略化された手法による「新・原文復元法」も提唱されている(越 2018)。

こういった手法には問題点もある。上の例で言えば、逆翻訳については、たとえば、「日 (SL1) → 英 (TL) → 日 (SL2)」の場合、SL1とSL2を比較することで、

TLがSL1の内容を正しく表しているかのチェックはできるが、TLの英文そのものの質のチェックはできない¹⁴⁾。二重訳読(原文復元法)では「英 (SL1) → 日 (TL) → 英 (SL2)」となるが、SL1は英語母語話者による英語の原文、TLは学習者による日本語訳(またはプロによる翻訳)、そしてSL2は学習者による英語翻訳となる。この場合、たしかに、SL2をSL1と比べて、できるだけSL1へと近づける訓練をすることで英語の表現力を伸ばすことができるが、自分の英文の弱点を知るのには難しい。

では、学習者が作成した英文をより良くするにはどのような方法を取ればよいだろうか。それが、次に述べる方法、つまり、パターンの的には「英 (SL1) → 日 (TL) → 英 (SL2)」であるが、SL1は英語学習者が作文した英語であり、それを日本語 (TL) に訳し、さらに英語 (SL2) に訳す作業に機械翻訳ソフトを使用する方法である。

2.3 翻訳ソフトによる逆翻訳を用いた英語学習法¹⁵⁾

ここで言う翻訳ソフトとは、旅先でちょっと便利な音声翻訳機や、スマホでかざすとレストランのメニューが翻訳されるようなアプリではなく、Google翻訳、DeepL翻訳、Weblio翻訳、みらい翻訳といったインターネット上で使用できる機械翻訳のソフトウェアのことである。現在、かなりの数の言語に対応している。以前は、英語とフランス語、英語とドイツ語といった比較的近い言語ならともかく、英語と日本語では、翻訳の精度は劣ると思っていたが、最近AIの恐るべき発達でかなり正確な訳になっていると実感することがある。もちろん、たまには、語の選択がコンテキストに合っていないといった不満があるものの、全般的にかなり精度は高いように思える。

試しに「彼の行いは常識で言えば受け入れることはできませんが、しかし、状況を考えるとやむを得なかったものと思います」という日本語を上記の翻訳ソフトにかけてみよう。ここでは、それぞれのソフトウェアの翻訳精度を比較するのが目的はないので、順不同に並べてみる¹⁶⁾。

・ His deeds are unacceptable in common sense,

but I think it was unavoidable given the circumstances.

- ・ His actions are unacceptable according to common sense, but given the circumstances, I think he had no choice.
- ・ I can't accept his behavior by common sense, but considering the situation, I think he had no choice.
- ・ When saying his conduct by common sense, it isn't possible to accept, when the situation is considered, but I think it was inevitable.

いかがだろうか。個々の訳文の検討はしないが、それぞれの訳し方には特徴があり、どれもかなりよく訳していると思う。「やむを得なかった」の部分も適切な主語を補ってI think he had no choice. と英語らしい訳になっている。

では、これを逆翻訳という方略で英語ライティング学習・指導にどのように応用するかということだが、流れとしては次のようになる。

0. 与えられた日本語，与えられたテーマ

↓

↓ (学習者による作文)

↓

1. SL1 (学習者の書いた英文)

↓

↓ (機械翻訳)

↓

2. TL (翻訳ソフトによる日本語訳)

↓

↓ (機械翻訳)

↓

3. SL2 (翻訳ソフトによる英語訳)

SL2とSL1を比較することで、語の選択、文法、構文、コロケーションなどをチェックする。

では、Google翻訳、DeepL翻訳を使ってデモを行ってみよう(前者をG、後者Dと略す)。まず、「学習者

による作文」の箇所に適当に間違いを含む英文を使ってみる。

1. We meet Mike in a bookstore three o'clock tomorrow.

↓

2. (G) 明日3時に本屋でマイクに会います。

(D) 明日の3時に本屋でマイクと会う。

↓

3. (G) I'll meet Mike at the bookstore at 3 o'clock tomorrow.

(D) I'm meeting Mike at the bookstore tomorrow at 3:00.

1では動詞の時制表現をわざと間違えてみたが、3ではI'll meetやI'm meetingと修正されている。後者は近い未来の表現となっていて、会うことが確定事項としてとらえているのであれば、3(D)の方がよりよい表現だと思う。前置詞については、1のin a bookstoreと① three o'clockが、3では双方ともatになっている。場所の場合はinでもよいが、それはコンテキスト次第で、一般的に場所を点と認識するとatの方がよい。また、時間の流れの一点である時刻の前にはatがくる。最後に冠詞であるが、1のin a bookstoreは文法的には間違っていない。しかし、これだと「ある任意の」本屋ということで、未定か、どの本屋かを気にしていないことになる。ふつうに考えて、明日会うのなら、どの本屋かわかっているだろうから、3のように定冠詞theの方がよい。

1は、構文的には大丈夫な、通じる英文だと思う。その証拠に翻訳ソフトでは、正確な日本語訳を提示してきた。しかし、1の英文の弱点である機能語(ここでは前置詞と冠詞)の用法については、3で見事に修正されている。その点をしっかりとチェックして、自分の弱点を知り、さらに、しっかりと文法書や辞書でその理由を確認すれば、次からは類似の間違いを減らすことができよう。

では、もう一例挙げてみる。私の受け持つクラスの学生(学部1年)が書いたミニエッセイの一部から、少し長めの文で試してみたい。ここはDeepL翻訳を

用いた結果のみを示す。

1. I fully understand how important it is in society to graduate from college, and I also know how people who leave school early are seen by others. Moreover, when I think that studying hard to enter university is wasted, I find it even more difficult to quit school.

↓

2. 大学を卒業することが社会的にいかに重要であるかを十分に理解していますし、早く学校を辞めた人が周囲からどのように見られているのかも知っています。また、大学に入るために一生懸命勉強したことが無駄だったと思うと、学校を辞めることはもっと難しいと思います。

↓

3. I fully understand how important it is socially to graduate from college, and I also know how people around me look at people who quit school early. They also find it more difficult to quit school when they feel that all their hard work and study to get into college was for nothing.

1と3を比較してみると、1の段階ですでに比較的良好に書けていると思うが、how people who leave school early are seen by othersと受け身で書いた箇所は、how people around me look at people who quit school earlyのように能動態に改まっている。また、when I think that studying hard to enter university is wasted, I find it even more difficult to quit schoolの箇所は文法的には間違っているとはいえないものの、3のThey also find it more difficult to quit school when they feel that all their hard work and study to get into college was for nothingの方が、主語がthey (= people)で統一され、明快な文構造になっている。1と3ではこの箇所の主語が異なっているが、3の方が全体のまとまりがよいように見える。その他にも、冠詞や前置詞の使い方、コロケーションなど、1と3との比較で参考になる点は多い。

英語でミニエッセイを書かせる課題を出した場合、

翻訳ソフトをこっそり使っている学生もいるかもしれない。もちろん、それはルール違反であり、そもそも英語の力はつかないし、そういった学生の場合、提出された課題の英文と教室で書かせた英文と比べると、その違いが明白なので、ズルはすぐにばれてしまう。また、加工もせずに、翻訳ソフトの英文をそのままコピーしてくる学生もいて、その場合は割りと簡単に不正が発覚してしまう。

しかし、ものは使いようである。英語教師が翻訳ソフトを使って授業を行うなど不謹慎極まりないと思われる方がいるかもしれない。だが、英語母語話者ではない日本人の英語教師の怪しいかもしれない直観（直感）に頼って学生の書いた英文をチェックするのは正直言って心もとない。むしろ、機械翻訳を使ってでも、SL1（学習者の書いた英文）とSL2（翻訳ソフトによる英語訳）の違いを吟味して、より良い表現とその理由をしっかりと説明してあげる方が、学生も自分が改良すべき点がよくわかり、英語ライティング指導の効果が上がるのではないだろうか。

そして、学習者が自学自習をする際に、英語母語話者、あるいは英語上級者によるチェックが期待できないときにも、機械翻訳ソフトを使うという手法は便利ではないだろうか。あくまでも、機械である以上、完璧とは言えないが、上記のような無料の翻訳ソフトでもかなり優秀である。さらに、有料のより精度の高い翻訳ソフトを使えば、より大きな効果が期待できるかもしれない。

3. おわりに

同じアウトプットの英語といっても、「話す英語¹⁷⁾」と「書く英語」、別の言い方をすれば「通じる英語」と「正しい英語」は分けて考えなくてはならない。シンガポールとマレーシアでは、SinglishやManglishといったご当地英語が話されている。その他の国や地域にもこういった現象はある。このように、「話す英語」では、必ずしもイギリス人やアメリカ人のように話す必要はなく、むしろ、多様な英語(Englishes)を認めようという傾向はたしかにある。しかし、「書く英語」は標準的な英語¹⁸⁾でなければならない。でなければ混乱をきたす。

数年前、香港のいくつかの大学でSelf-Access Language Learning（外国語の自学自習支援）の現地調査をしたとき、その責任者と話す機会を得た。香港の大学では、さすがに国際都市だけあって英語を担当する教員はさまざまな国から来ている。必ずしも英語母語話者とは限らない。そういった英語の多様性を認めてはいるが、論文は標準的な英語で書くように指導しているという（江藤ほか 2018）。それは当然のことで、我流の英語で書かれた論文を受理することはできないだろう。

「文法なんか気にしないで、とにかく話してみよう」ということであれば、いろいろな世界の英語（World Englishes）に触れてみることで、私たちは勇気を与えられるかもしれない。私たち日本人の多くは英語、それも英語を話すことに苦手意識を持っている。それをなくすには、SinglishやManglishのように少々癖のある英語でも十分に受け入れられるのだと知ること、英語学習のモチベーションを高めていくことにつながるだろう。

しかし、上に述べたように、「文法なんか気にしないで、とにかく書いてみよう」は困る。この場合、少なくとも、書いた後に、正しい英語かどうかチェックする必要がある。世にnative speakerは存在するが、native writerはいない。生まれつき名文・美文を書くことのできる天才がまれにいるかもしれないが、ふつう文章を正確に「書く」ためには、相応の知的訓練、すなわち教育を受ける必要がある。話ことばとしては少々違和感がある、かっちりとした英語He is taller than I (am) . といったような規範的・保守的なルールにしたがった「正しい」英語を意識的に学んでいかななくてはならない。一般的に書きことばは保守的であり（古田 2015: 17）、寛容な「耳」に対して、「目」は新奇さに敏感なのである（チェムバレン 1939: 14）。

上に述べた翻訳ソフトを使った英語ライティング学習・指導では、翻訳ソフトが訳出した英文を吟味し、自分の書いた英語と比較するために必要な英語力が求められる。そのためには、基本的な文法の知識と語彙の習得、そして逆説的ではあるが、英語の構文を分析して正確に読み解く基礎力が必要である。今日、四技能についての議論が喧しいが、限られた授業時間の中

では読解力という一技能だけでも徹底的にやったほうが、かえってコストパフォーマンスはよいように思えるし、それであれば多くの日本人教員も十分な自信をもって指導できるのではないだろうか。

本稿で提案した手法は文法訳読式英語教授法のひとつと考えることができる。文法訳読は、今日の英語教育において批判の多いところではあるが、正しい英語を書き、知力を鍛えるという意味では、再評価されるべきであると思う（Cook 2010; 山田 2021）。なんといっても、中世ヨーロッパのリベラルアーツ教育の伝統を継ぐ手法なのであるから。

謝辞

英語学習や英語の授業に機械翻訳を使用するという試みやその報告は多くなされているが、最初、私はその効用、というかそもそも英語学習に翻訳ソフトを利用すること自体に対して懐疑的、批判的、消極的であった。しかし、「大学入試改革を契機とする新しい高大接続英語教育用eラーニングパッケージの開発研究」（JSPS 科研費18H00683、代表・岡田毅 [東北大学]）の研究会、また、外国語教育メディア学会関東支部ラーニング・デザイン研究部会（代表・佐藤健 [東京農工大]）主催の「第2回 Google for Education ワークショップ」における山口高嶺先生（秀明大学）のご発表「Google Classroom を使ったライティング指導」に大いなる刺激と示唆を受け、翻訳ソフトの英語授業への活用の有効性を考えてみようと思った。山口先生はじめ関係各位に感謝を述べる次第である。

注

- 1) 私が確認したのは *A Short Introduction of Grammar Generally to be Used* の1567年（Reprint）、1699年、1789年に出版された版である。また、*Oxford English Dictionary* の解説にあるように、リリーが活躍した当時は Grammar とはラテン文法のことを指していた。
- 2) Orthographia（正書論）、Etymologia（語形論）、Syntaxis（統語論）、Prosodia（韻律論）のこと。2つ目の Etymologia は英語の etymology にあたる語で、今日では「語源（学）」の意味で使われるが、この当

時から19世紀頃までは近代言語学の一部門である形態論 (morphology) の意味で使われていた。

- 3) マレーの英文法の初版は1795年であるが、私が確認したのは1796年、1824年に出版された版である
- 4) grammatica (文法), logica (論理) あるいは dialectica (弁証), rhetorica (修辞) のこと。これらはいずれも、「ことば (言語理解・表現)」に関連するもので、「数」に関係する四科 (quadrivium) ——arithmetica (代数), geometrica (幾何), astronomia (天文), musica (音楽) ——と区別される。
- 5) これは、今日の英語母語話者 (というよりも、西洋人の多くと言ってもよい) が古典語 (ラテン語, ギリシア語) を学ばなくなったことによるものだと考えている。自動詞 / 他動詞は、英語では intransitive verb / transitive verb であるが、省略語の vi / vt はそれぞれラテン語の verbum intransitivum / verbum transitivum の語頭字である。また、最近の英語圏で発売されている英文法書の多くは、現在分詞 (present participle) と動名詞 (gerund) を区別せずに、一括して *ing form* といったカテゴリーに分類しているが (もっとも、Huddleston and Pullum [2002: 1220-1222] のように gerund を present participle と区別しなくなった理由を説明しているものもある), こういったことも古典語学習の衰退の故であろうと考える。まさに、リリーのラテン文典の効用のひとつにあったように、外国語 (古典語) 文法の学習を通して、母語の文法、母語の言語学的特徴に意識がはじめて向くというのは正しい見解であろう。
- 6) 米国コロンビア大学の公共政策研究機関である American Assembly が推進する、世界100カ国近くの大学が公開しているシラバスを収集し分析する Open Syllabus Project がある。そのデータに登録されている大学の授業で指定された教科書の中でもっとも多いのが *The Elements of Style* である。https://opensyllabus.org/ 参照 (retrieved at 12:30 on October 7, 2021).
- 7) 原文では強調は黄色のマーカーで示されているが、本稿では印刷の都合上アンダーラインに改変した。
- 8) 個人的な思い出になるが、私がアメリカのジョージタウン大学 (PhD コース) に在学していたとき、コースワークのタームペーパーの英語を友人のアメリカ

人学生にチェックしてもらった。その友人は、私の拙い英語を丁寧にチェックしてくれたのだが、as well as を使った箇所興味深い修正が入っていた。

正確な文は忘れてしまったので類似の簡単な例文で示すと、Tom as well as Jane is rich. としていたのが Tom as well as Jane are rich. に修正されていたのである。その根拠は Tom as well as Jane は Tom and Jane と同じだから主語は複数だという。私が日本の高校で習ったのは、A as well as B は「Bと同様にAは」という意味でAに焦点が当たるとのことだったが、英語母語話者で、しかも言語学専攻の博士課程の学生が言うのであるから、そういうものかと思ひ、言われるがまま修正して提出した。すると、教授から返却されたものには Tom as well as Jane ~~are~~ is rich. のように、are が is に修正されていた。教授は、これはよくある文法ミスだとコメントしてくれた。Tom, as well as Jane, is rich. のように、コンマで as well as Jane を挿入句的に扱ってあげれば間違えることはないだろうが、コンマがなければ英語母語話者にとってもややこしいらしい。悪名高い日本の受験英語であるが、意外なところで役に立つものである。ちなみに、APA Manual の例文には The percentage of correct responses, as well as the speed of the responses, increases with practice. と as well as the speed of the responses の前後にコンマがあるが、前版 (第6版) 以前は、私が調べた第4版まで The percentage of correct responses as well as the speed of the responses increases with practice. とコンマはついていない。また、第7版でなぜコンマが追加されたのかも説明もない。

- 9) Long time no see. は「好久不見」という中国語表現を一字一字そのまま英語に置き換えたということらしい。
- 10) non-verbal はジェスチャーや目線といった非言語的な要素, paraverbal はストレス・イントネーション, テンポや笑いなどを指す (cf. Kramersch 1998: 27).
- 11) ここで言う「話ことば」とは、いわゆる日常的な場での会話であって、リリーやマレーの言う「話す」とはフォーメラルスピーチのことで弁論術を指し、それはここでの「書きことば」に含まれることを断つ

ておく。

- 12) It is surprising not only that pencil-and-paper scores predicted this result but also that all other predictors were less accurate. のように文中で対の関係になる部分, また The participants were told to make themselves comfortable, to read the instructions, and to ask about anything they did not understand. のように内容的に連続する要素は同じ語形や文構造で並列するということ。
- 13) <https://www.crimsonjapan.co.jp/blog/back-translation/> 参照 (retrieved at 12:00 on October 8, 2021).
- 14) 正確な翻訳をするために逆翻訳は有効であるとしつつも, 言語や内容によってその効果は異なるという指摘がある。医療関連文書のような専門性の高い文章では, 単語の正確性が重要で, そういった専門用語が使用される文章においては逆翻訳という手法が有効である。その反面, 文章の表し方や読みやすさといった表現力を重視する文章は逆翻訳は不向きなこともある。重要なのは, 実際に使用されるのは目標言語 (ここで言えば英語) なので, 目標言語として訳文を評価, 検討する必要がある。
<https://www.crimsonjapan.co.jp/blog/back-translation/> 及び <https://to-in.com/blog/100849> を参照 (retrieved at 14:00 on October 8, 2021).
- 15) 英語学習や英語の授業に機械翻訳を使用するという試みやその報告は多くなされているが, 本稿ではその内容の紹介, 検討はしない。参考になった文献として, 一部ではあるが, 自動翻訳の高度化については成田 (2019), 坂西・山田 (2020), 外国語教育における機械翻訳の指導については藏谷 (2019), 田村・山田 (2021) を挙げておく。
- 16) これ以降に挙げる翻訳ソフトの操作は2021年10月8日16:00-18:00 (JST) に行った。
- 17) 繰り返すが, ここで言う「話す」とは, リリーやマレーのいう「話す」とは違って, 日常的な場でのカジュアルな会話だと理解してほしい。
- 18) 「標準的な英語」については議論のあるところだが, 単にイギリス人やアメリカ人が話す言葉ではない。それは, 日本の標準語が東京弁とイコールでないの

と同じである。それは, もしかするとどこでも話されていない, 「こうあるべき」という英語で, 規範文法というルールにしたがう英語だと言うべきかもしれない。英語母語話者にとって It's I. などはない表現であるから記述文法的には It's me. が正しい。しかし, アカデミックライティング教本では, この場合, 主格補語であるから It's I. が規範文法的に正しいのである。

参考文献

- American Psychological Association. (2020) *Publication Manual of the American Psychological Association* (7th ed.). Washington, DC: Author.
- 安西徹雄 (1982) 『翻訳英文法』大修館。
- チェムバレン, B. M. 吉阪俊藏訳 (1939) 『鼠はまだ生きてゐる』岩波書店。
- Cook, K. (2010) *Translation in Language Teaching*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- 江藤 裕之 (2004) 「Publication Manual of the American Psychological Associationの英文法記述について」, 『長野県看護大学紀要』第5号, pp. 35-43.
- 江藤 裕之 (2011) 「英語論文作成マニュアルの特徴とアカデミックライティングの授業への応用—MLA, APA, Chicagoの比較から」, 『東北大学国際文化研究科論集』第19号, pp. 117-125.
- 江藤 裕之 (2012) 「英語論文作成マニュアルにおける英文法解説—慣用よりも論理に重点を置く規範英文法」, 『東北大学国際文化研究科論集』第20号, pp. 181-189.
- 江藤 裕之 (2015) 『英文法のエッセンス』大修館。
- 江藤 裕之・北原良夫・長野明子 (2018) 「東アジアの準英語圏・非英語圏における英語学習サポートシステムの実態調査—その経過と香港地域の大学の調査結果報告を中心に」, 『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第4号, pp. 415-426.
- 江藤 裕之 (2020) 「*Publication Manual of the American Psychological Association* 第7版の文法記述について—保守からリベラルへと変わるアカデミックライティング」, 『東北大学国際文化研究科論集』第28号, pp. 53-60.
- 古田直肇 (2015) 『英文法は役に立つ! 英語をもっと深く

- 知りたい人のために』春風社.
- Flynn, V. J. (1945) "Introduction", V. J. Flynn ed., *A Short Introduction of Grammar by William Lily*, New York, NY: Scholars' Facsimiles & Reprints, pp. iii-xii.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Kramersch, C. (1998) *Language and Culture*. Oxford, UK: Oxford, University Press.
- 藏谷伸子 (2019) 「英語ライティング指導における機械翻訳サービスの利用異議—実践に向けた移行準備として」, 『国際情報研究』第16号, pp. 107-128.
- Lupton, J. H. (1921-22) "LILY, WILLIAM (1468?-1522)", L. Stephen and S. Lee eds., *The Dictionary of National Biography*. Vol. XI. Oxford, UK: Oxford University Press, pp. 1143-1145.
- McKnight, G. H. (1928) *Modern English in the Making*. New York, NY: Appleton.
- 成田一 (2019) 「自動翻訳の高度化と英語教育—AI機能を備えた自動翻訳の跳躍」, 『JAPIO Year Book 2019』, pp. 264-273.
- 越朋彦 (2018) 「原文復元法について」, 『首都大学東京教職課程紀要』第2号, pp. 91-104.
- 興津達朗 (1976) 『言語学史』大修館.
- Robins, R. H. (1997) *A Short History of Linguistics*. London, UK: Longman.
- 坂西優・山田優 (2020) 『自動翻訳大全 終わらない英語の仕事が5分で片づく超英語術』三オブックス.
- Sweet, H. (1891) *A New English Grammar: Logical and Historical*. Oxford, UK: At the Clarendon.
- Strunk, W. and White, E. B. (1979) *The Elements of Style*. Needham Heights, MA: Allyn & Bacon.
- 田村颯登・山田優 (2021) 「外国語教育現場における機械翻訳の使用に関する実態調査：先行研究レビュー」, 『MITIS Journal』第2号, pp. 55-66.
- 鶴見良次 (2007) 「ラテン語文法訳読と母語教育—ジョン・ブリングリー『ルードゥス・リテラリウス』と17世紀イギリスの英語教育」, 『成城文藝』第200号, pp. 65-79.
- 渡部昇一 (1975) 『英語学史』大修館.
- 渡部昇一 (1979) 『統 知的生活の方法』講談社.
- 山田優 (2015) 「外国語教育における『翻訳』の再考—メタ言語能力としての翻訳規範」, 『関西大学外国語学部紀要』第13号, pp. 24-35.

